

[研究資料他]

アクティブラーニングからディープアクティブラーニングへと つなげる講義の試行的取り組みと諸課題

～合同授業「教育総論」のティーチングポートフォリオに基づいて～

A New Lecture Trial and Problems Mediating between Active Learning and Deep Active Learning — Based on the Teaching Portfolio of Principles of Education the Shared Instruction System

浅田 豊

Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師，青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授
Aomori Chuo Junior College, Aomori University of Health and Welfare

Key words ; アクティブラーニング、ディープアクティブラーニング、ティーチングポートフォリオ

1 はじめに

教職課程では、全人的発達の観点から児童生徒の生きる力を育成する立場にある将来の教員を養成するために、必要なカリキュラムが複数年にわたり効果的に編成されている。その中で受講生たちは、自らの人格を高めていくことや使命感・教育観を見つめなおすことはもとより、教職の意義に関する知識、基礎的な理論、指導方法、社会人としての資質、グローバルな視野に立って行動できる力などを段階的に身に付けていく。無論教師という職業の性質からも、自分に足りない知識を新たに補いつつ、自律的・主体的に生涯にわたって学習を計画的に進め、課題探究的にあるいは自己教育的に学習・研究を深める力が求められている。このような背景から、教職課程の学習過程では、アクティブラーニングが適切な教授・学習方法であると考えられる。

しかしながら、アクティブラーニングはそれ自体が目的化してはいけなないと考えられる。方法としての効果を発揮し学習の充実へとつながる必要がある。また、授業中に一時的にその時間だけが楽しいといったような、単にはいまわるだけの体験・経験的な活動は、回避されなければならない。さらに、被指示的・形式的な学習を背景とするいわゆる浅いアクティブラーニングよりも、段階的に深いアクティブラーニングへと無理なく移行させていくことが、講義の目的達成のためには重要ではないだろうか。以上のような問題意識を踏まえ本稿では、合同授業五年目の新たな実践研究において、アクティブラーニングからディープアクティブラーニングへとつなげる講義の試行的取り組みと諸課題

を明らかにしたいと考える。具体的には、表1のように学習への阻害要因を整理・概観することから開始し、当該学習の促進を目指す援助に関しては、主に情意・基礎的学習・思考面の各観点から、検討できればと考える。

2 情意的側面のティーチングポートフォリオに基づく省察

受講者の背景として、社会科系の教員免許取得を目指す4年制大学の学生と栄養教諭免許取得を目指す短期大学の学生による合同授業であるため、対象全体の統一的な集団意識の形成と雰囲気づくり、並びに個々の学生のニーズの充足の両立に注意を払った。その際、相対的に規範意識が低下しやすいと言われるなれ合い型での学生－教員関係や学生を威圧的・権威主義的に指導する管理型の関係性を回避し、受講者全体を満足できる学習成果獲得へと導くために、ラポールの形成にとくに注意を払った。その上で、表2にあるような、関心・意欲・態度の側面からの援助を行い、単に講義中に紹介される専門的用語を暗記しそれを再現することや、教員から指示されたことのみに従って読解・記述・形式的話し合いを実施することから段階的に脱却し、より深い学びへとつなげるための視点を有していくことを今年度の合同講義では重要視した。

3 基礎的知識・技能的側面のティーチングポートフォリオに基づく省察

知識や理解の程度は、課題の解決や探求・分析・創造といったようなより高度の思考、あるいは理論的な内容を日常的な事象に当てはめていく作業的思考のための土台となるものであり、根本のところで知識不足が見られる場合や理解が不十分であると、思考の展開に支障をきたすことが考えられる。そのため、表3にあるようなきめ細やかな支援を心掛けた。

4 思考・判断・表現の側面からのティーチングポートフォリオに基づく省察

認知面においては、抽象的思考が得意な学生から具体的な事例の列举に優れた学生まで、あるいは咄嗟のひらめきや口頭表現が得意な学生から時間をじっくりとかけた上で文章を積み重ねることに長けた学生まで、受講者の特性は実に多様である。また表現においても、論理的に説得力をもって伝達できる学生から一つのキーワードや詩的表現を効果的に用い他者を引き付けることが上手な学生まで存在する。ケアレスミスの多寡についても同様に多様である。そのため、授業中の支援としては、表4にあるような、幅広いレディネスに対応できる支援方法を事前に準備しつつ、さらに、その回・その時間過程の中で指導上の微調整を図ることが肝要である。

5 諸課題～まとめに代えて～

学生が能動的に学習するという性質から、いかにして学生の自己学習・議論・質疑応答・課題作成の時間を十分に確保できるかが、一つの課題であると考えられる。しかし科目は単発の講演会のように単独で存在するものではなく、無論カリキュラムの中に存在し、コース全体を貫くカリキュラム上の理念が存在するため、科目群あるいはコース全体で人材を育成する観点が不可欠である。すなわち科目担当者同士が直接的に連絡調整をすることはなくとも、セメスターの中で物理的に可能な範囲での、各科目内での学生の学習時間を前提としなければならない。そこで、自己学習は他の科目群の学

習時間を圧迫するような過剰な時間を要するものであってはならないが、十分な自己学習が適切な範囲において、また相互関連的に深まりを見せ、そのことを通じて機能的・相互補完的にコースの目標を達成することが求められよう。この点から、授業者である科目担当教員は、コース全体を十分に研究・把握した上で、授業の目標・内容・方法・評価を定めることがまずは課題である。

さらに今後は、教員側のポートフォリオから振り返るだけにとどまらず、エビデンスに基づき、学生側のラーニングポートフォリオの側面からも、学習の管理・深化等が反映されるように導く必要がある。今回の教育実践においてはアクティブラーニングからディープアクティブラーニングへとつなげる試行的取り組みに焦点を当てたが、授業計画・指導案作成の段階からディープアクティブラーニングを前提とした教育実践を目指し、適切なPDCAサイクルのもと、その取り組みを継続できればと考える。

6 文献

- 1) 浅田豊「アクティブ・ラーニングの方法に基づく教育内容の改善と諸課題：合同授業での実践を事例として」『青森中央短期大学紀要』29 55～59頁、2016年。
- 2) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会総則・評価特別部会資料2-2「アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力に関する参考資料」2016年。

表1 一般的なアクティブラーニング阻害要因とその指導・支援方法例

考えられる阻害要因	教育総論における指導・支援方法例
1 学習持続力の学生間格差	多様な活動による授業構成：導入(5分)⇒適宜巡回・観察しながらの説明(20分)⇒板書及び課題提示、ノートへの思考結果の記述(20分)⇒小グループによる思考の共有・相互伝達、発表練習(20分)⇒個別発表と質疑応答・ポイント確認(20分)⇒終末(5分)
2 配布資料読解・活用・管理能力の差異	重要なところにカラーマーカーを付ける助言／マーカーを付けた教師用手持ち資料の回覧または提示／学習者用ポートフォリオ作製の助言／教師用ポートフォリオの回覧または提示
3 レポート作成力の課題	章立てや論理の構造などを含むレポートの書き方の例を示し指導
4 小グループによる協議への恥ずかしさ	具体的・個別的な役割を与え、その作業へ集中させる⇒恥ずかしさの軽減へつながる効果
5 マイク発表への苦手意識	ノートに書かれたことを読み上げることから開始し、ステップを踏ませる。⇒具体性をもって即座に褒めて励まし、感想や考えを補足してよいなどの次に続く課題を提示する。
6 基礎的ラーニングスキル充実の学生間格差	授業序盤では、口頭説明中に重要な文言は可能な限り板書するようにし、徐々に、すべてを板書しなくても各自適宜メモを取ることができるように導く。

表2 教育総論の情意的側面に関し学習を一層深化させることにつなげる基礎的支援

事項	意義	留意点
コマ目標の共有とコマ単位での気づきの蓄積(関心面)	シート記入を通じ、受講者自らが自分の気づきそのものを振り返ることができるようになることが学習推進力向上につながる。	コマ目標共有時には全体観察により理解不足が生じていないかを常に確認。また、シートには序盤は長文を書けない学生であっても批判をせず、具体例や理由を書こうと助言することで、中盤以降には十分に書けるようになっていく。
予習・復習への自律的取り組み(意欲面)	学習の内化・外化の基盤形成として役立つ。	予習・復習のポイント、理由、得られる成果などを教員から明示的に説明し、学生が納得し自律的・自己管理的に取り組むことが重要。空き時間の声掛けも有効。
座席指定の機能面での配慮(態度面)	ピア評価への連結／多様なレディネスの中での相互理解の促進／私語や居眠り、遅刻の防止	受講者が管理主義的に感じた場合、学習活動の委縮につながってはいけないため、内発的に学習の向上につながるように、教員による雰囲気づくりが不可欠。

表3 教育総論の知識・技能的側面に関し学習を一層深化させることにつなげる基礎的支援

事項	意義	留意点
発言に関する形成的評価(知識面)	知識の曖昧な部分や誤りを速やかに把握できる。	補足的・補充的学習や次なる選択的・発展的課題の提示へとつなげることが考えられる。
ノートの自己管理状況に関する形成的評価(理解面)	つまずきの発見及び、教育総論という授業の目標から、例えば生きる力の概念などを理解しているかどうかを確認し指導案の修正の必要性の有無を見極めることが可能。	各自の理解できている部分と理解できていない部分を自発的・自覚的に明確に区別できるよう個別に支援した。
資料収集・読解・分析・整理に関する形成的評価(技能面)	哲学的・歴史的・政策的領域等のような領域であっても苦手意識なく、取り組む能力を育成できる。	教員の手助けのもとで、問題を設定し、問題に対する多様な要因や解決策を考え、それらを整理しまとめていくという方法知の基礎的能力を体験的に身に付けさせることが重要である。

表4 教育総論の思考・判断・表現の側面からの学習を一層深化させることにつなげる基礎的支援

事項	意義	留意点
予め難易度を調整した段階的発問の工夫 (思考面)	教育課題を受講者自らが抽出でき、教育的事象の相互の関連や意味を考えることができる。	思考過程そのものを受講者自らが振り返ることができるような発問・助言が不可欠である。
体系的な練習問題の形式による実演・演習(判断面)	報道・手記等から得られた教育的営為・実践にかかわる良い事例・好ましくない事例を紹介する際、その適否・正誤を受講者が自主的に決定する能力が養われる。	最初は間違えることをおそれず、徐々に精度を上げていくことの重要性を受講者に理解させることが求められる。
模範的事例提示による刺激付与 (表現面)	自分の経験・感情・提案等を区別して表現することができる。	文章の骨格付け・展開・肉付け・推敲のトレーニングを焦らずに受講者に継続させることが不可欠である。